

# 高安古墳群発掘調査概要

府営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業八尾地区の調査

2004年3月

大阪府教育委員会



## はじめに

大阪府八尾市信貴・生駒山西斜面には多くの古墳が今なおその姿をとどめている。

中でも標高 488 m の高安山の斜面にある高安千塚こと高安古墳群は、横穴式石室をもつ古墳が群集することで古くからとりわけよく知られる。

豊臣秀吉が大坂城築城にさいして石室石材を採取し、江戸時代の『河内名所図会』には石室を乱掘した様子が示される。明治時代初めには、ウィリアム・ゴーランド、エドワード・モースが欧米に本古墳群の実測図、写真を紹介した。

国内でも、1888 年『東京人類学会雑誌』3 - 28 に古墳の一部が紹介され、1923 年の『中河内郡誌』にはすでに 540 基の古墳が認識されていた。その後、1966 年の『古代学研究』42・43 合併号では、今日ある日本横穴式石室の編年研究の基礎が本古墳群を用いて築かれた。そして、本府教育委員会がその重要性を省み、1965～67 年には「服部川地区」を中心として古墳の分布・測量調査を実施した。その後、その中心部は寺院内、庭園業用地などを中心とすることや丘陵中腹への道が狭小なことから、古墳群の核をなす 130 基ほどの古墳は保存されたまま現在に至る。

この度、丘陵中腹を南北に高安古墳群中心部を通過する農道が計画され、本府教育委員会が 2001 年から確認調査と発掘調査を一部開始することになった。

本年度はそのうち、計画路線北半の確認調査と発掘調査を実施した。その結果、<sup>おんこうじあと</sup> 菌光寺跡に東接する地点では中世から近世にかけての屋敷地と考えられる集落跡を確認した他、その南側では縄文土器の出土や弥生時代後期の土坑、近世の礫群などを検出した。これらの所見は丘陵中腹における古墳以外に対する文化財の知見を豊富にするとともに、河内平野を一望できるすぐれた立地にに基づき、重層した過去の営みがこの地域にもひろがることが分かった。

調査にあたっては八尾市教育委員会、中部農と緑の総合事務所、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々にご協力いただいた。厚く感謝するとともに、今後とも文化財保護行政にご理解、ご協力をお願いするとともに、この著名な高安古墳群のよりよい保護・保全・活用に向けて共に推進できるようお願いする次第である。

平成 16 年 3 月

大阪府教育委員会文化財保護課長  
向井 正博

## 例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府環境農林水産部の依頼を受け、府営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業八尾地区に先立って実施した八尾市大字神立他所在の高安古墳群の遺構・遺物確認、及び発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、文化財保護課調査第一グループ総括主査岩崎二郎、主査一瀬和夫が担当した。
3. 調査に要した経費は、大阪府環境農林水産部が負担した。
4. 調査の実施にあたっては、八尾市教育委員会、大阪府環境農林水産部、中部農と緑の総合事務所をはじめとする諸機関、諸氏の協力を得た。
5. 本調査の写真測量は、(株)航空測量センターに委託し、撮影フィルムは当会社に保管している。
6. 本書の編集は、一瀬が担当し、執筆は調査担当者その他、参加者が分担した。
7. 本概報は、300部を作成し、一部あたりの単価は662円である。

## 目 次

はじめに

例言

目次

第1章 調査の経過	3
第2章 調査の概要	6
第1節 1区 神立新設区間北側の調査	6
第2節 2区Aトレンチ 神立新設区間南側の調査	7
第3節 2区Bトレンチ 大窪新設区間北端の調査	10
第4節 2区の出土遺物	13
第3章 まとめ	16

写真図版

報告書抄録

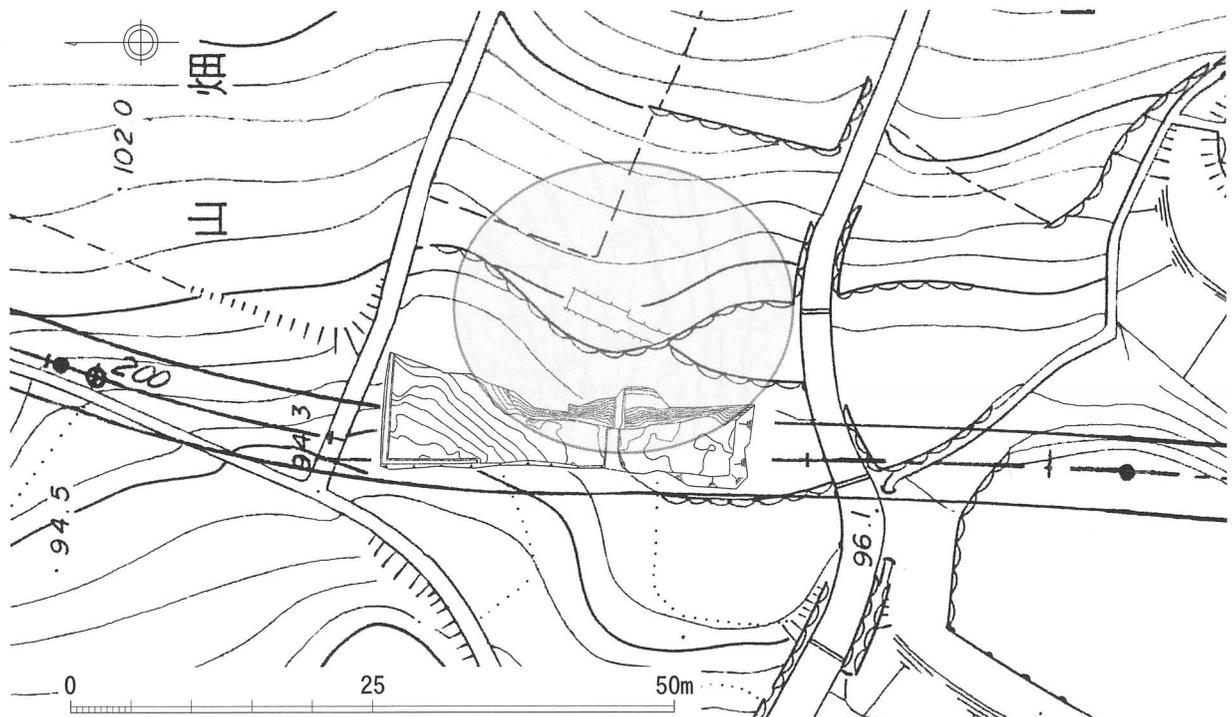
# 高安古墳群発掘調査概要

## 府営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業八尾地区の調査

### 第1章 調査の経過

府営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業として八尾市大字神立・大窪・山畑・服部川他所在高安古墳群を南北に貫く本線幅6mの建設がもちあがった。そのうち、早期工事着手区間の路線南半にあたる山畑地区のうち、北側にある高安87号墳（八尾市番号）の墳丘の一部が路線内に含まれる可能性があり、平成13年度に本府教育委員会技師横田 明を担当者として確認調査を実施した。その結果、墳丘裾があたることが分かり、平成14年度に同総括主査岩崎二郎・主査小林義孝を担当者として路線内の発掘調査を実施し、東側にある長さ8.1mの横穴式石室の周囲を緩やかに弧を描くように約20mの範囲で墳丘裾部を検出した（注1）（図1・3）。

本年度は、路線北半にあたる2ヶ所、<sup>こうだち</sup>神立新設区間北側の確認調査（1区）を7月に実施し、12月から神立新設区間南側の確認調査（2区Aトレンチ）と大窪新設区間北端（2区Bトレンチ）の発掘調査を実施した（図2）。その成果は次章に示すとおりであるが、2区Aトレンチでは豊富に古代～近世の遺構が存在し、遺物が出土したことにより、八尾市教育委員会と協議の上、西接する玉祖神社の神宮寺とし、『河内名所図会』に本尊に千手観音をまつたとある<sup>おんこうじあと</sup>菌光寺跡と関連するとして、遺跡範囲を東側に拡大し、平成16年度に全面調査を行うことになった。この遺跡における過去の採取遺物には平安時代の鬼瓦、鎌倉・江戸時代の軒瓦がある（注2）。（一瀬）



第1図 山畑地区 高安87号墳西側調査平面図



第2図 各調査区位置図（北半） 1・2区



第3図 各調査区位置図(南半) 山畑地区

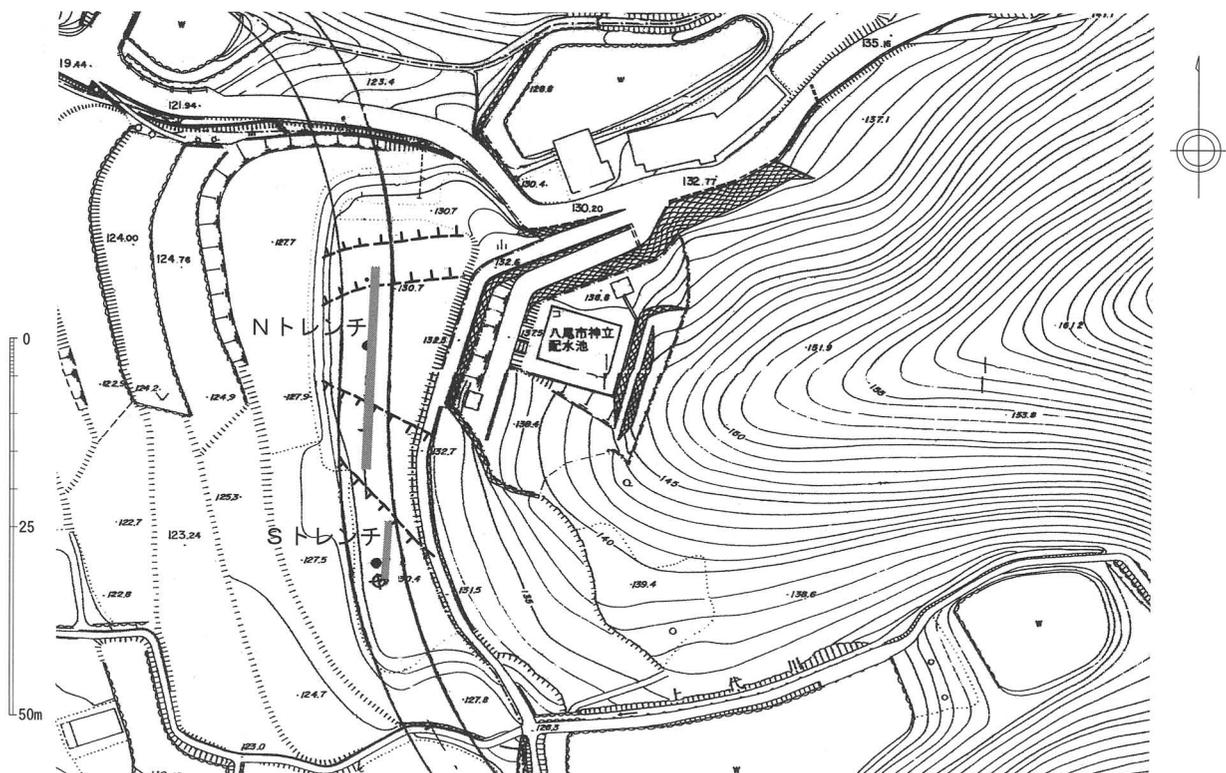
## 第2章 調査の概要

### 第1節 1区 神立新設区間北側の調査

路線の最も北側の「みずのみ道」に取り付く予定地からやや南西にある八尾市神立配水場に西接する調査区である。貼り出した丘陵のテラス状となる場所に南北2本のトレンチを設けた。

Nトレンチは配水場がのる丘陵先端側を敷地中央西よりに丘陵稜線を横切るかたちで長さ26.5m、幅0.5mを設定した。基本層序は第1層は表土であり0.2mの厚さがある。続く第2層となる小礫を多く含む茶褐色砂は稜線部にあたる北側にはなく、南側で0.5mの厚さとなる。第3層はこれとは逆に、北側に下降する斜面に対して茶褐色粘質シルト（マンガン粒含む）が0.2mの厚さで被う。第4層は明茶褐色粘質シルトで0.1mの厚さで、第5層の地山である小礫ブロックを含む褐色砂の全体を被う。したがって、地山は中央北側が最も高く南北に下降することになり、北は上から第1、3、5層の順、南は第1、2、4、5層であり、全体に第3層より上が削平を受ける。遺構・遺物は認められなかった。

SトレンチはNトレンチより南側の一段下がったところをこれも丘陵を横断するように長さ8m、幅0.5mで調査した。Nトレンチと共通した土層を示し、第1層以外は南に向かって下る。第1層は0.3mの厚さ、第2層は0.2～0.6m、第3層は0.2m、第4層は0.1m、その下の地山は北側のみ検出できたにすぎない。したがって、北側は第1～5層の順、南は0.9mを掘削し、第1・2層のみ検出となった。しかし、Nトレンチにはほとんどなかった第3層が北半に安定して見られた。このトレンチでも掘り込み、遺物等は見当たらなかった（第4図）。（一瀬）



## 第2節 2区Aトレンチ 神立新設区間南側の調査

2区Aトレンチは玉祖神社の南西側にやや下ったところにあたる。溜池を隔てて南北方向に4本のトレンチを設定した(第5図)、(写真図版4)。

### A1・2トレンチ

従来から知られる菌光寺跡の範囲はこれらトレンチより一段下がった西側にある。同じ尾根筋の一段高くなったところには玉祖神社があり、ちょうどはさまれる格好になる。

トレンチで検出した地山面では、標高が116.8 mから115 m以下へと南に下がるが、115 mで一旦、平坦になる。

### A1トレンチ

最も北側のトレンチで、丘陵稜線上にある神社の参道から8 m南方に、長さ10.0 m、幅2.0 mで設定した。

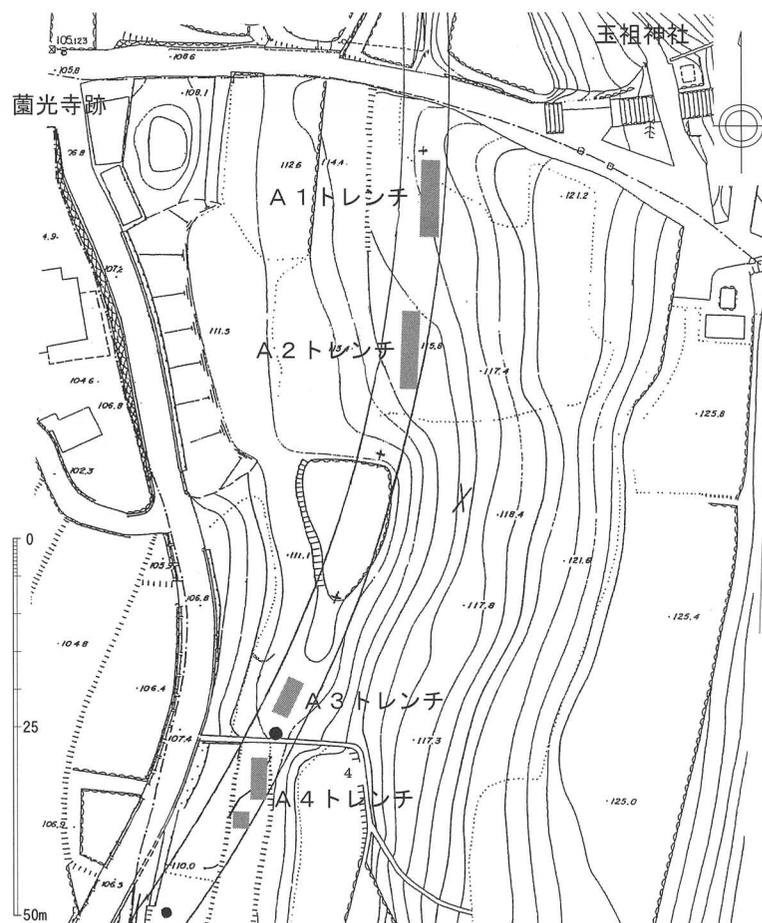
現地地形は稜線から南西に向かって全体が下降する。検出した地山はそれ以上に $10^\circ$ 程で傾斜する。第1層の表土の厚さは0.1~0.2 m、第2層は黄味灰褐色細砂で0.2 m~0.3 mの厚さで全体を覆うが、第3層は南側2~3 mに残るのみで、小礫を含む黒褐色細砂となる。

調査区中央やや南よりで幅0.3~0.5 mの南北溝を検出した。これより北は黄味茶褐色砂礫の地山が均等に上がるが、南側は一旦平らになり、その端でさらに掘り込みがある。遺物は第2・3層にかなり混入しているが、第2層は土師器皿・小皿・土釜・甕、瓦器椀、瓦質火舎、磁器、丸・平瓦が出土する。土師器や瓦から近世に属する。第3層が確認できる範囲では上層も含めてこの付近に遺物が集中し、土師器皿・小皿、瓦器椀、瓦質土釜、布目の平瓦等出土することから中世に所属すると考えられる(第6図上)。

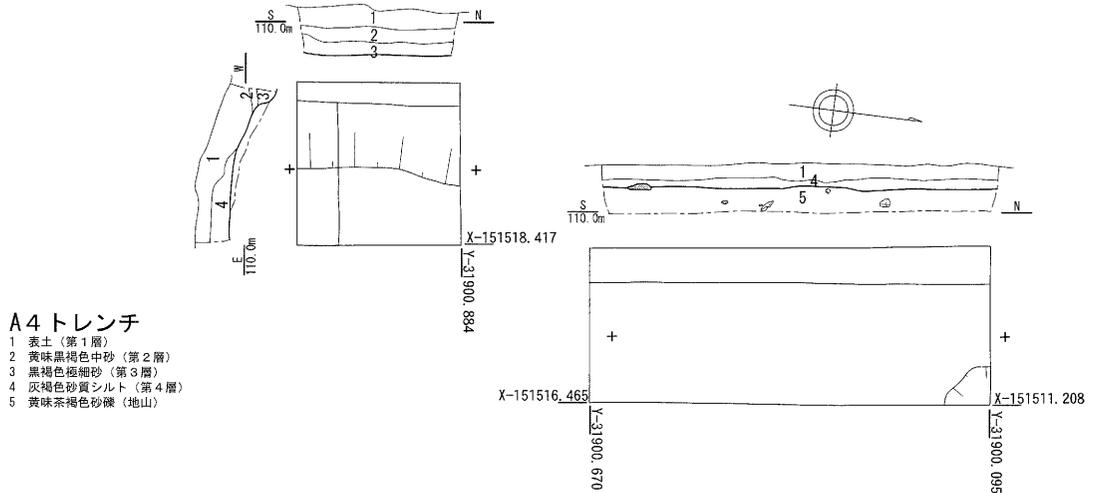
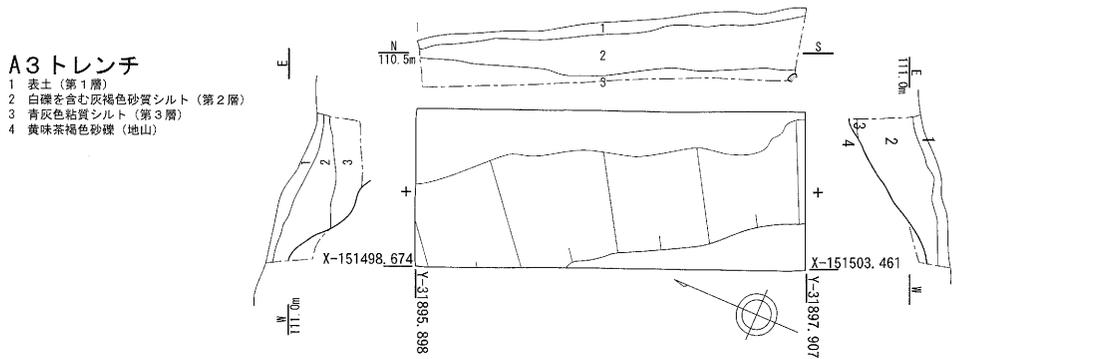
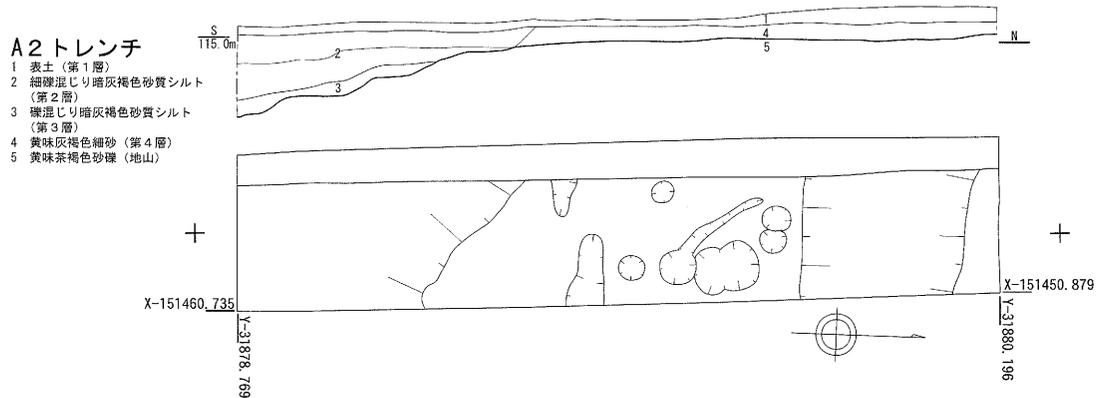
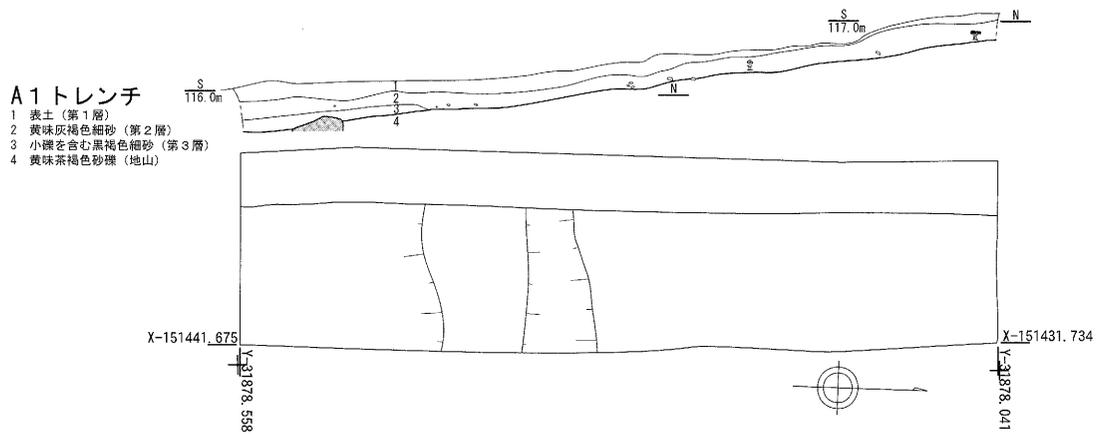
### A2トレンチ

A1トレンチより南側へ10 mの地点、やや下がった平坦な耕作地に、長さ10.0 m、幅2.0 mでこのトレンチを設定した。

第1層は表土で0.2 mの厚さ、その下の黄味灰褐色細砂の第4層は全体に0.2 mであり、南端



第5図 2区Aトレンチ設定図



X、Yの数値は、世界測地系2000 (測地成果2000)、座標系：6系。水準は、大阪府、標高T.Piによる。

第6図 2区Aトレンチ各平面・土層断面図

で落ち込みに切られる。この落ち込み埋土は谷埋没土と整地に伴うものと考えられる。その上層にあたる細礫混じり暗灰褐色砂質シルトの第2層は南側3mの範囲に認められ、南端で0.8mの厚さがあり、2層に分かれる。その下に第3層の礫混じり暗灰褐色砂質シルトがあり、南端で0.2mの厚さがある。地山は黄味茶褐色砂礫である。

上層の遺構面は第4層を検出面とし、主に暗灰褐色砂質シルトを埋土とする掘り込みが見られた。北端では幅1mの東西溝が、南側では20°の傾斜で下降する谷部分にかかる落ち込みがあり、その間にはピットと小溝が確認できた(第6図上)。

遺物はトレンチ全体で土師器皿・小皿、瓦器椀、青磁椀等の細片がまんべんなく出土し、特に南端落ち込みで集中していた。

### A 3・4 トレンチ

これらトレンチは、A 1・2 トレンチより溜池を隔て南に40mほどの地点で、地山の標高110.0～111.3mとなり、4mほど下がる。

### A 3 トレンチ

このトレンチは溜池の南西端の法面を長さ5.0m、幅2.0mで調査した。第1層は0.1mの厚さの表土、第2層は溜池への崩落土となり、現地表が南側へ高くなる分、白礫を含む灰褐色砂質シルト層が厚くなり、最大0.6mとなる。第3層は溜池帯水層で、青灰色粘質シルトがたまる。地山は東に向かって黄味茶褐色砂礫であり、全体に東側に向かい40～45°の角度で急激に落ちる。

第1・2層より土師器皿、瓦器椀、瓦質土釜、磁器片の出土があり、西側上部に遺構・遺物が存在する可能性が高い(第6図下)。

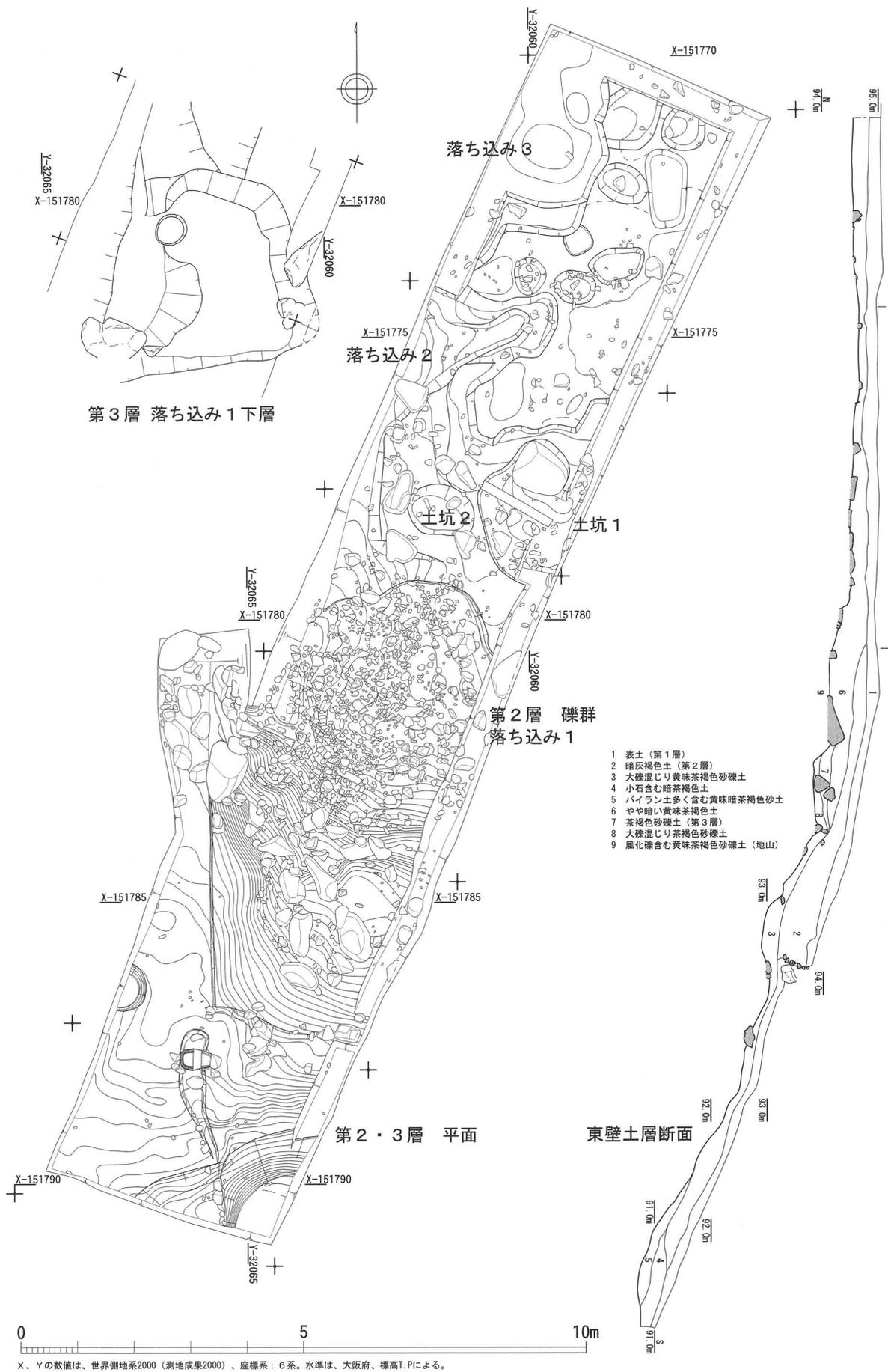
### A 4 トレンチ

このトレンチはA 3 トレンチより里道をはさんで南側に6m離れて長さ5.0m、幅2.0mを、そのすぐ南に連続して長さ、2.0m、幅2.0mのものを設けた。

北側のトレンチは、雛壇の畑となり、削平を受けるためか、平坦である。しかし、0.2m厚の表土の下に、第4層の0.1m程の厚さの灰褐色砂質シルト及び中砂があり、土師器皿、須恵質すり鉢、黒色土器、瓦器椀片を含み、この壇そのものが中世以前にさかのぼる可能性をもつ。地山は黄味茶褐色砂礫である。トレンチ北東隅で落ち込みを確認できた。

南側のトレンチの黄味茶褐色砂礫の地山は全体に西側に向かって22°の角度で急激に落ちる。第1層は0.2mの表土、第4層は東側のみに認められ0.3mの灰褐色砂質シルト、第2・3層は逆に西側の下降部分のみで、黄味黒褐色中砂、黒褐色極細砂の有機物層で表土に続く新しい時期のものである(第6図下)。出土遺物には、古墳時代頃の土師器甕等が出土し、古代以前の遺構・遺物が存在する可能性がある。(一瀬)





第8図 2区Bトレンチ 平面・土層断面

とする新しい時期のピット、落ち込みが認められた。

この遺構面には第3層の落ち込み1の窪み上部に相当する場所に礫群がある。一辺4m程の方形の範囲に拳大から人頭大の石が集積する。この集積には特に規則性はないが、東辺に沿って人頭大の石を南北方向に並べる列が一部に観察できた。また、その石列の西側の礫群上を中心にして土師器小皿片が散らばっていた(第9図5~9)。礫表面上において、何らかの露天祭祀を行っていた可能性が強い。この礫群自体は0.2~0.4mの厚さで集積しており、その中でも下部のものはあまり目的的に集められたものではなく、後で述べる落ち込みの窪みに石を中心に投げ込んだように見える。

第3層遺構面には、土坑2基と落ち込み3基を、北半の尾根頂部を中心に検出した。いずれも丘陵が東南東方向にゆるやかに下降するにしたがって、同方向に開いた沢状の窪みとなった部分が削平をまぬがれた故に残ったものである。

土坑1は2.7×2.0mの卵形の平面と深さ0.5mのすり鉢状の断面を呈する。下層の暗茶褐色土の有機物層からは比較的まとまって弥生土器壺・小形壺・高杯・鉢がまとまって出土した(第9図13~18)。同種の土器は第2層礫群の南西でも出土しており、ここから引きずられたものか、落ち込み1の下層から巻き上げられたものかは判然としない。また、埋土の中には縄文土器や石器片も混じっていた(第8図中)。

その南西側にある落ち込み1であるが、一辺4.0mの方形の平面で、逆台形の断面を呈し、西辺が削られるものである。最下層の茶褐色砂礫層はほとんど礫を含まない。この落ち込みが意識的に掘り込まれたことを証左するものとしては、地山に含まれる東辺中央の長さ1mを超える大石の西辺がこの落ち込みの東辺に沿って打ち割られたようになっていた箇所があることである(写真図版6-5の左上隅の石)。底面は地山に含まれる礫の凹凸が多少あるものの比較的に平らであり、北西側には直径0.5m、深さ0.05mの円形ピットがあった。上層では縄文土器片が出土したのみで(第9図3・4)、下層での出土遺物がなかったことから、時期は明らかにできないが、埋土の状況から判断すると、土坑1と併行ないしはそれ以前のものとなる掘込みである(第8図左上)。

これらの他に落ち込み3からも、少量ながら弥生土器片(第9図12)が出土しており、尾根上に弥生時代の遺構が広がっていたことが分かる。(一瀬)

## 第4節 2区の出土遺物

1区は出土遺物がなく、2区ではAトレンチで多くの土器・瓦類が出土したが、平成16年度に全面調査を予定しているため、遺物の報告はその際に委ねる。Bトレンチでは縄文土器・石器、弥生土器、土師器が出土する。

ここではBトレンチが単独地点であり、全面調査を行ったことから、出土遺物の主だったものを中心として、縄文土器（1～4）と弥生土器（10～18）、土師器（5～9）を計18点図化することとした（第9図、第1表）。中でも、土師器小皿は礫群中より多数細片が出土したが、図化できたのは5点のみである。

1・13～18は土坑1、3・4は落ち込み1、12は落ち込み3の遺構に伴い出土した。また5～8・10・11は礫群中より、2・9は第1層よりそれぞれ出土した。

1は鉢であろう。2条の沈線文の間に縄文を施文している。また、無文部と施文部分の境目に段を有する。2も1と同じく沈線文と縄文が見られる。3は鉢の口縁部と考えられ、1条の沈線文が施されている。4は4条の櫛歯文が施されている。いずれも、縄文時代後期前半ごろと考えられる。

5～9は土師器小皿である。口縁部径は6.8～8.2cmの間で、すべて内外面をナデで仕上げ、色調は赤褐色を呈する。5・6は他の小皿に比べて厚手である。6は外面に指頭圧痕が残っている。時期は近世でも古いものであろう。

10は高杯である。外面は縦位のハケの後に基部のみ横位のハケを施す。脚部内面にはシボリがある。

11・12・15は壺底部である。11・12は内面はハケを施す。15は底部外面に成形時の工具痕が残存している。外面ミガキ。底部内面にはハケの圧痕が残っている。

13は高杯の脚部裾である。脚端面に刻目を有し、外面にミガキを施す。内面はナデである。

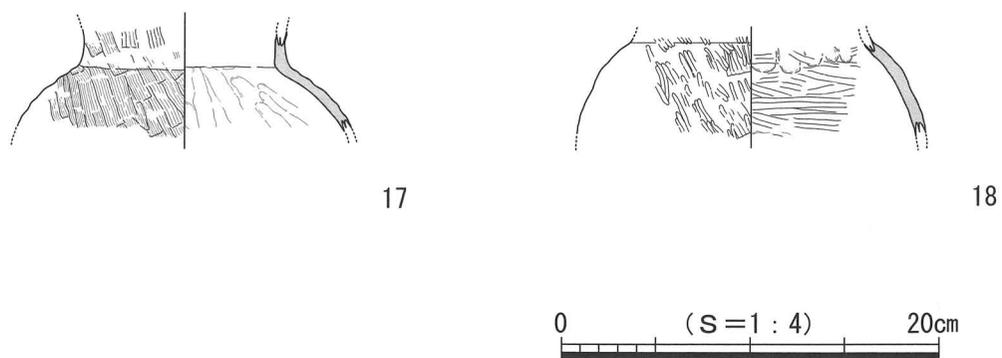
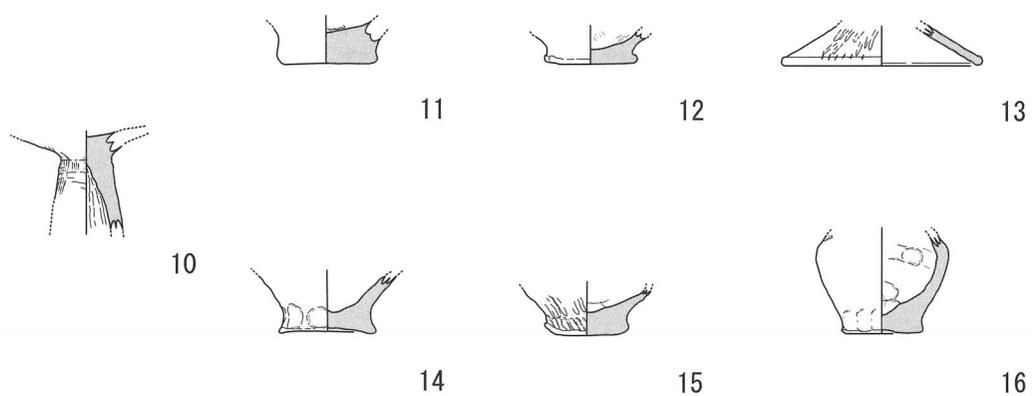
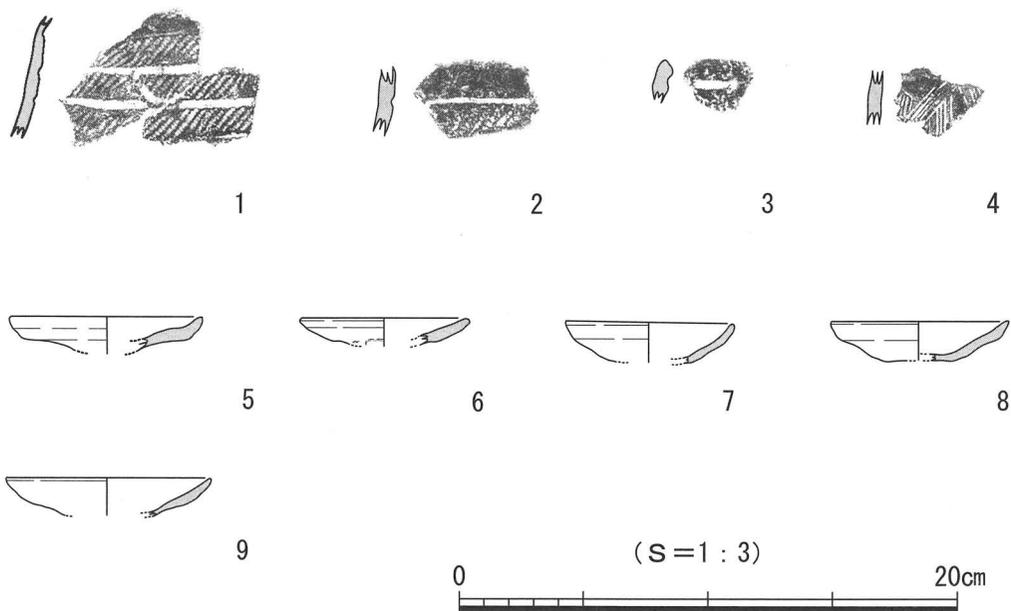
14は指頭圧成形された上げ底の鉢の底部。磨耗が激しく内外面共に調整は不明である。

16はミニチュアの壺である。底部はドーナツ形で、底部外面は指頭圧成形の後ナデ。内面には指頭圧痕が顕著に残っている。胎土が茶褐色を呈し雲母と角閃石を含むことより、生駒西麓産の胎土と考えられる。

17・18は壺である。17は外面ハケで内面は強いナデ。18は外面ハケの後にミガキを施す。内面はハケである。頸部内面には指頭圧痕が顕著に残っている。

10～18の土器は、いずれも弥生時代後期ないしは庄内期にかけての時期に属するものと考えられる。

(大矢)



第9图 2区 出土遺物

第1表 2区Bトレンチ出土遺物観察表

No.	出土地点	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調		残存率	備考
			口径	残存高	底径			外面	内面		
1	第3層 土坑1	縄文土器		4.8		やや粗	やや不良	暗茶褐色	褐色		
2	第1層 南側北上	縄文土器		2.7		やや粗	やや不良	明褐色	暗褐色		摩滅はげしい
3	第3層 落ち込み1	縄文土器		1.6		やや粗	やや不良	暗茶褐色	茶褐色		
4	第3層 落ち込み1	縄文土器		2.2		やや密	やや不良	暗茶褐色	褐色		
5	第2層 北側南半 礫群中	土師器 小皿 (復元)	7.6	1.3		密	良好	赤褐色	赤褐色	1/8	
6	第2層 北側南半 礫群中	土師器 小皿 (復元)	7.2	1.1		密	良好	暗橙色	暗橙色	1/8	
7	第2層 北側南半 礫群中	土師器 小皿 (復元)	6.8	1.7		密	良好	赤褐色	赤褐色	1/4	
8	第2層 北側南半 礫群中	土師器 小皿 (復元)	7.2	1.5		密	良好	赤褐色	赤褐色	3/8	
9	第1層 南側北上	土師器 小皿 (復元)	8.2	1.6		密	良好	赤褐色	赤褐色	1/2	
10	第2層 南側北上 礫群中	弥生土器 高杯	裾・2.8	2.2		やや密	やや不良	にぶい橙色	黄橙色	裾部完存	摩滅はげしい
11	第2層 南側北上 礫群中	弥生土器 壺 (底部)		5.1	4.8	密	良好	暗褐色	暗褐色	底部完存	1~2mmの黒褐色 礫を多く含む
12	第3層 落ち込み3	弥生土器 壺 (底部)		1.9	5	やや粗	良好	赤褐色	赤褐色	底部完存	
13	第3層 土坑1	弥生土器 高杯		2.1	10.8 (復元)	密	良好	褐色	褐色	1/10	
14	第3層 土坑1	弥生土器 鉢		2	5.2	粗	良好	橙色	橙色	底部完存	摩滅はげしい
15	第3層 土坑1	弥生土器 壺 (底部)		2.9	4.4	密	良好	赤褐色	赤褐色	底部完存	
16	第3層 土坑1	弥生土器 小形壺		5.2	4.2	密	良好	茶褐色	暗茶褐色	底部完存	1mm程度の黒褐色 礫と雲母を多く含む
17	第3層 土坑1	弥生土器 壺 (復元)	頸・10.2	5.2		密	良好	赤褐色	褐色	0/1	
18	第3層 土坑1	弥生土器 壺 (復元)	頸・12.8	4.8		密	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	1/6	

### 第3章 まとめ

今年度の成果として、縄文・弥生時代、古代そして、中世以降の知見があった。また、扇状地から急な丘陵斜面に移り、明瞭な稜線を残す丘陵中腹部の標高 100 m 台を道路予定路線が横断するという立地からも、本調査地点が特異な位置を占めるものであることがうかがえ、そこでの遺構・遺物の存在があったということだけを取りあげてもその意義がある。

まず、縄文・弥生時代の成果である。生駒山地西麓にある本地点付近において、古墳時代以前に関する出土例は扇状地には多い。中でも、玉祖神社の参道入口付近にあたる松の馬場の南側、標高 15～20 m にある高安遺跡は著名である。縄文から古墳時代にかけての複合遺跡であり、碧玉・滑石製の玉造遺跡としても知られる。また扇状地中腹では、縄文時代早・前期の石器が知られる標高 45 m 前後の山畑遺跡や前・中期の石器の大竹遺跡がある。ただし、丘陵上になると遺物等の知見は少なく、標高 80 m ほどの恩智銅鐸出土地が知られるくらいとなる（注2）。

今回はそれより高い標高 91～95 m の 2 区 B トレンチで縄文時代後期の土器・石器が出土し、弥生土器とそれを伴う土坑があった。このことから、丘陵斜面にはまんべんなく縄文時代遺跡が存在するとともに、弥生時代の方は扇状地の上方が不明だが、遺構を検出した本地点付近の標高が河内平野南半部を一望でき、時期も後期であることから高地性集落が展開していた可能性が高い。また、高安遺跡の南側からのぼる尾根筋上にあり、両者の関係も気になるところだ。

2 区 A トレンチの方は菌光寺跡として知られる東側にあたるが、その中心部より丘陵を一段のぼった場所にあたる。またそれは、玉祖神社ののる丘陵の南西斜面斜面沿いでもある。A 1・2 トレンチ周辺の地形をみると、東側が高低差 5 m の急な崖面となり、その直下でも土師器などが確認できるとともにトレンチで検出した平坦面をも参考にすると、丘陵南西斜面を削出すことによって一辺 20 m の方形テラスが削出されていることになる。そして、その面には遺物が全面にわたって分布することになる。範囲内に瓦などの出土もあることから、屋敷地ないしは堂のような施設が想定できる。この地点は次年度に全面調査を控えることから、その時に、そうした施設の検出所見が具体的に導き出せるであろう。

また、2 区には高安古墳群の北側にある芝塚古墳が知られる（注3）。今後、調査は路線南側に展開し、古墳群中核部分に近づく。ここでは参考までに路線計画とその部分との 1965～67 年の墳丘測量図（注4）と関係図を掲げておく（第10図）。現在は大型車両の進入、通過がきわめて制限されることから、以前の測量時点と周辺景観がさほど変わっていない。そしてさらに、その北側の踏査所見から、従来、必ずしも明確に認識されていなかった小墳丘の古墳状隆起も多々存在する。

計画路線にかかる本書冒頭にも記すこの著名な古墳群をどのように、地元、道路建設、文化財が互いに協調し、保護・活用していくかは、直面する今後の大きな課題なのである。（一瀬）

本調査では、細川晋太郎・大矢祐司・小野木ルリコ・松村祐香・寺田麻子をはじめとする諸嬢諸氏の参加があった。

- (注1) 大阪府教育委員会 2004『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』7  
 (注2) 財団法人 大阪文化財センター 1976『大阪文化誌』第6号 特輯 清原得巖所蔵考古資料図録  
 (注3) 財団法人 八尾市文化財調査研究会 1993『高安古墳群 芝塚古墳』八尾市神立 1081 の農業用地道路新設工事に伴う古墳の発掘調査報告 報告 38  
 (注4) 大阪府教育委員会 1968『八尾市高安群集墳の調査(第2次)』昭和42年度服部川その他地区調査概要



第10図 服部川地区古墳墳丘測量図



写真図版1 高安古墳群北半 航空写真(垂直)



写真図版2 高安古墳群南半 航空写真(垂直)



1. 2区（北東から） 手前中央：心合寺山古墳



2. 2区Aトレンチ（南西から）



1. A 1・2 トレンチ (北から)



3. A 2 トレンチ 遺構検出状況 (南東から)



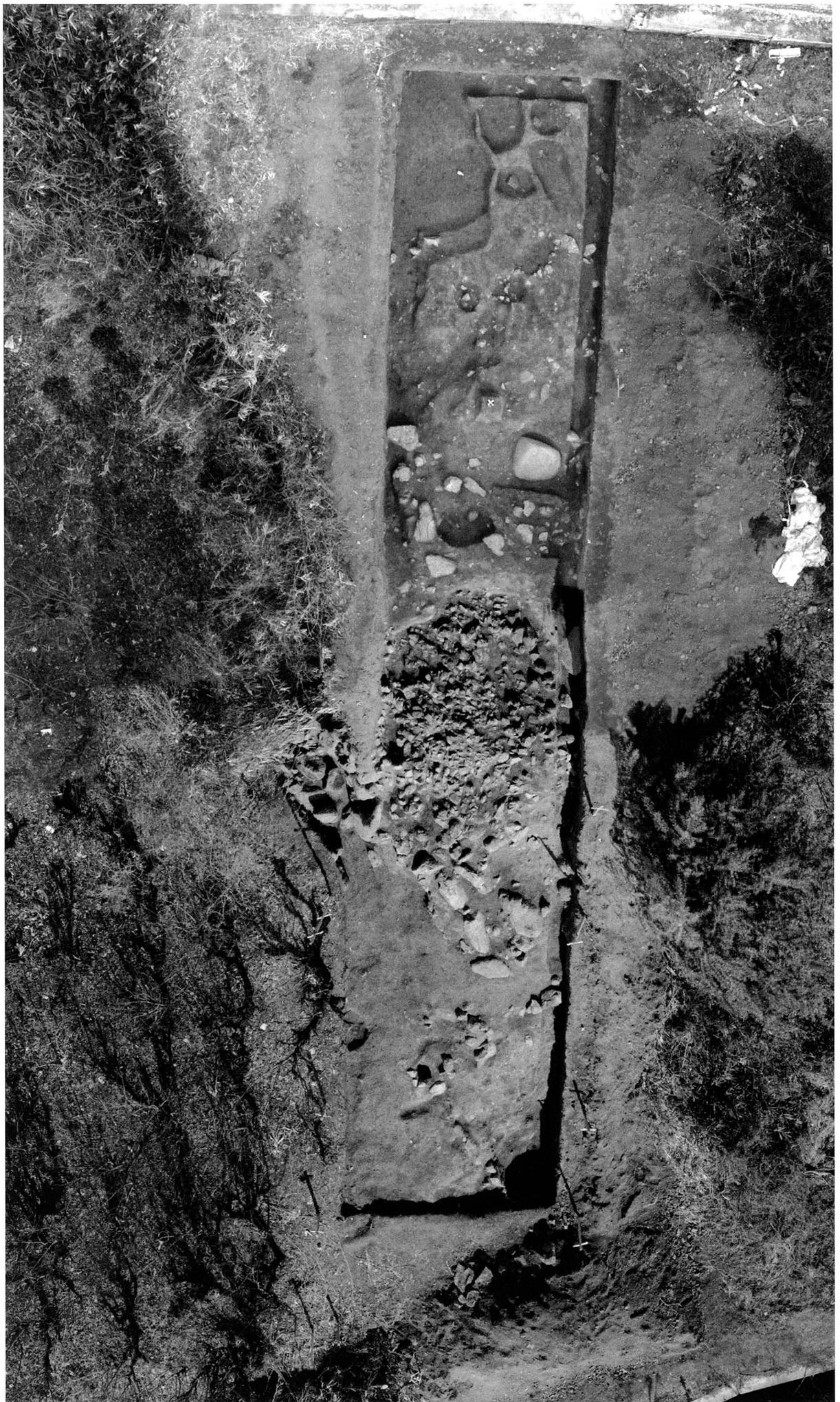
2. A 4 トレンチ (南から)



4. A 3 トレンチ (南東から)



5. A 4 トレンチと河内平野 (北東から)



写真図版5 2区Bトレンチ 航空写真(垂直合成)



1. 南半 (南西から)



2. 第2層 礫群 (北東から)



3. 第2層 南北石垣 (南西から)



4. 第3層 土坑1 (北東から)



5. 第3層 落ち込み1 (北から)

# 報告書抄録

ふりがな	たかやすこふんぐん はくくつちょうさがいほう							
書名	高安古墳群発掘調査概要							
副書名	府営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業八尾地区の調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	一瀬和夫・大矢祐司							
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06-6941-0351							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
たかやすこふんぐん 高安古墳群 おんこうじあと 藺光寺跡	やおしおおあざこうだち 八尾市大字神立 他	27212	12 59	34° 38' 03"	135° 39' 08"	H15年7月7日 ∫ H16年3月31日	152m <sup>2</sup>	農道整備 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高安古墳群	集落・墓	縄文時代 弥生時代 近世	弥生後期：土坑、竪穴 近世：礫群	縄文時代：土器 弥生時代：土器、剥片 近世：土師器	
藺光寺跡	集落	古代  中世～近世	中世～近世：溝、土坑 落ち込み	古代：土師器、瓦  中世：土師器、瓦器 陶磁器 瓦  近世：土師器 陶磁器	

<b>高安古墳群発掘調査概要</b>	
府営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業八尾地区の調査	
発行	大阪府教育委員会
	〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06-6941-0351
発行日	2004年3月31日
印刷	株式会社 中島弘文堂印刷所

